

東京 2020 オリンピアン・パラリンピアン記録

東京 2020 オリンピアン・パラリンピアン記録 —遠藤大由—

遠藤大由

【経歴】

1986年（昭和61）12月16日（生）～

出身：埼玉県

競技：バドミントン

2002年～2005年 小松原高校

2005年～2009年 日本体育大学

2009年～ BIPROGY

2022年3月 現役引退

2022年4月 BIPROGY ダブルスコーチ就任（2023年4月よりヘッドコーチに就任）

【競技歴】

2016年 リオデジャネイロオリンピック 5位入賞（遠藤大由・早川賢一ペア）

2017年 マレーシアマスターズ（GPG） 4強

2018年 WT ファイナルズ 準優勝

マレーシア OP（S750） 準優勝

タイ OP（S500） 準優勝

韓国 OP（S500） 優勝

2019年 WT ファイナルズ 準優勝

フランス OP（S750） 4強

タイ OP（S500） 4強

香港 OP（S500） 4強

ドイツ OP（S300） 優勝

2020年 全英 OP（S1000） 優勝

2021年 全英 OP（S1000） 優勝

東京オリンピック 5位入賞（遠藤大由・渡辺勇大ペア）

1. 競技との出会い

バドミントン競技との出会いは、真ん中の兄がバドミントン部に所属しており、その部活動の見学にいったのがきっかけでした。兄がプレーする姿をみて、自分もやってみようと思ったのだと思

いますが、明確な理由はなく、「なんとなく」といった表現がもっとも良く当てはまる気がします。もともと幼稚園のときからサッカーをしていましたが、サッカーから移行して野球とバドミントンを始めたため、当時は試合などの日程が重なり、どちらに参加するか選択を迫られた記憶が残ってい

ます。小学校時代に指導してくださった監督の私の印象は「性格的に繊細で優しい心を持っている子」だったそうです。

何となく始めたバドミントンですが、これまで継続することができた原動力は、「強くなりたい」「全国で一番になりたい」という目標があったからです。はじめてその目標を達成したのは、インターハイでのダブルス優勝でした。シングルスで優勝することを目指していましたが、試合途中で右足を負傷し、叶いませんでした。翌日には症状が改善されたためダブルスに出場して結果的に優勝することができましたが、嬉しさ半分といった感じでした。

2. 日体大の思い出

高校卒業後、バドミントンの強豪であった日体大に入学することを決めました。高校のときに指導を受けた先生が二人いるのですが、その二人ともが日体大出身でした。大学の様子は先生方からいろいろと教えていただいていたので、厳しいことも理解していましたが、厳しい環境に身を置いたほうが強くなれるのではないかと考え、入学を決意しました。

入学後に一番初めに気づいたことは、先輩たちとの体格の違いについてでした。ウエイトトレーニングでは、上がるはずもないのに先輩と同じ重さを上げようと必死になっていたことを覚えています。入学後は健志台の寮で寮生活を送っていましたが、それぞれの部活で今では笑い話になるような独特な決まりがあったことも記憶に残っています。

在学中の競技成績については、大学2年時にシングルスでインカレ優勝を達成することができました。その後日本代表の団体戦メンバーに選出され、厳しい環境に飛び込んだ自分の選択は間違っていなかったと実感しました。

日体大時代の一番の思い出は3年生のインカレ団体戦で、4年生と仲が良かったこともあり、そ

の4年生の最後のインカレで団体戦の優勝に貢献できたことが良い思い出です。自己満足かもしれませんが、一番手が出た自分のシングルス勝利が、よい流れを生み、団体戦優勝につながれたと思っています。

卒業後は、BIPROGY（入社時の名称は「日本ユニシス」）に入社することになりました。BIPROGYではシングルス中心のつもりでしたが、4年生のインカレで全十字靭帯を断裂してしまい、入社後にダブルス専門に移行したかたちになりました。入社にあたっては、他大の同期に早川賢一選手がいるのですが、彼とも相談して同じところでお互いを高め合おうと考えて選びました。早川選手とは後にダブルスのパートナーを組むことになるのですが、彼は、インターハイのダブルス優勝のときの決勝戦の相手で、不思議な縁を感じていますし、受け入れてくれたBIPROGYに感謝しています。

3. オリンピックの感想

オリンピックには2度出場していますが、まずはリオオリンピックの感想を書きたいと思います。リオは、出場することが決まったときはとても嬉しかったですし、「ここからが本番だ」という気持ちもありました。ですが、改めて振り返ると「ソワソワしていて現実味がなかった」というのが率直な感想になります。例えば、選手村を見渡してもテレビでしか見たことがないような名だたる選手ばかり。緊張であり記憶が鮮明ではありません。とは言え、試合では自分自身の実力を発揮することができたと思っています。パートナーの故障もあり、成績的には満足いくものではありませんでしたが、個人的なパフォーマンスとしては過去一番ではなかったかと思います。

次の東京2020では、代表の座を掴むまでがとても大変でした。それまでのダブルスパートナーが引退し、左利きの選手と新しいペアを組むことになりました。利き腕が異なる選手とペアを組む

には、それまでのやり方をすべて変えなければならぬですし、世界ランキングもほぼ、一から上げていくようなイメージになりますので、かなり厳しい戦いが続きました。それでも、新しくダブルスを組むと決めたときから東京 2020 に「いけないいけない」ではなく、「出場する」と決めていたので迷いは一切ありませんでした。

実は、前のパートナーが引退を決めたとき、私も引退することを考えていました。新しいパートナーから申し出を受けた時には大きな決断が必要でしたが、決め手となったのはその年に開催された実業団の団体戦でした。新しくパートナーを組むかもしれない選手とともに出場したのですが、自分自身が緊張感をもちながら、まだ「負けたくない」「勝ちたい」という気持ちで試合をしていることに気づき、この戦う気持ち、闘志がある限りは競技を続けられると判断しました。もし、緊張感やプレッシャーも感じずに、ただ楽しんで試合に臨んでいたら引退していたかもしれません。

厳しい戦いを勝ち抜いて東京 2020 に出場することができましたが、そこで感じたことはリオオリンピックとは正反対なものでした。まずは、無

観客という状況だったため声援は一切なく「これはオリンピックなのだろうか？」という感想をもちました。また、新型コロナウイルス感染症対策でいろいろと制限があり、選手はほとんど宿泊地と体育館の往復で、外国の選手と関わることもできず、オリンピックの醍醐味を味わうことができなかつたのは残念でした。

試合には緊張感をもって臨みましたが、結果についてはもちろん満足はしていませんし、その時の感想は「自分はこの程度だったのか」「もっとミスを恐れずにやるべきだった」「自分自身にがっかりした」で、簡潔に述べると「守りに入りすぎた」という感じです。

東京 2020 の一年延期についてはタラレバの話になってしまいますが、2020 年 3 月に全英オープン優勝した勢いそのままにオリンピックに挑むことができたら、様々な可能性が広がっていたのかもしれませんが、逆に、延期となった分、1 年間しっかり練習もできましたので何とも言えませんが。

4. 今後の目標

今後の目標については、自分たちがやってきたこと、経験などをこれからの選手たちに伝えていきたいと考えています。そして、自分たちが残してきた成績や結果以上のものを残すことのできる選手を育てたいと思っています。

そのためには、まず選手に伝えたいことを正確に、そして上手く伝えることができるように、自分自身の伝達力やコミュニケーション能力、語彙力などを高める必要があると考えています。バドミントンの試合はインターバルの短い競技なので、その短い時間の中で、必要なことをしっかりとアドバイスすることが重要になります。いわゆるベンチワークが、これからコーチとして活動していく私に求められるものであり、その技量を高めることが目標となります。



(C) BIPROGY

5. 日体大生へ一言

1, 2年生はたくさんの講義とテストや部活で多忙な毎日を送っていると思います。そして, 3年生, 4年生になると, それまでに比べていろいろと自由にできるようになります。忙しい時にはその忙しさが理由や言い訳になり, また, 自由になるとさまざまな誘惑にかられることになりま

す。ですが, 自身が日体大に入学したときの目標を忘れずに, その目標に向かって歯を食いしばって踏ん張って欲しいと願っています。私も大学時代は途中いろいろな寄り道をしましたが, 最終的に「日本一になりたい」という目標が, プレることなく大学生活を送ることができました。ぜひ入学時の目標を叶えるために踏ん張ってください。

(受理日: 2023年5月12日)